

副作用における性差の検討

にいがた調剤薬局 / 椿 芳恵 小片 真樹子 田原 清子
川上 忍 阿部 直美 渡部 陽子

【目的】

副作用の発現率や効果発現に性差が見られることがあるが、今回当薬局の薬剤服用歴管理指導簿に記載した副作用歴を用いて、イベント発生の原因薬剤や症状・性別を分析することにより、副作用発現と性差の関連性について検討する。

【対象と方法】

- (1) 対象:2005年3月～2005年8月に来局した患者7,241名中、イベント発生により服用(使用)中止となり、その後症状の改善が見られた634例(全体の8.76%)
- (2) 方法:原因薬剤や症状・性別を分析し、副作用発現と性差の関連性について検討する。

【結果】

約9%の患者にイベント発生が原因で薬剤中止となった経験があり、副作用経験患者は50代以上に多くなり60代に最も多くみられた。対象患者の男女比は男性33%:女性67%、全来局患者に占める割合は男性6.2%:女性11%であった。イベント発生の原因となった薬剤は多い順にエナラプリル39件、カルバマゼピン14件、ニフェジピン13件、テオフィリン12件、ロキソプロフェンナトリウム11件であった。エナラプリルによる主な症状は咳で、男性14件:女性25件と女性が男性に比べて有意に多く見られ、ACE阻害薬での咳の発現が女性に多いとされていることを裏付ける結果となった。なお、ACE阻害薬によって咳が発現した患者の平均年齢は男性67.8歳:女性66.9歳で大きな差はなかった。服用日数は男性が平均602.4日・女性が平均388.4日であり、両者に差は見られなかった。

また、ピオグリタゾンによる浮腫は4例発生していた。ピオグリタゾンでの浮腫の発現は女性に多いとされているが、当薬局におけるピオグリタゾンによる浮腫の発現率も全服用者に対して男性5%:女性60%と女性に多いことがわかった。

【考察】

- ・本検討の対象患者全体の比率は女性が男性より有意に多い結果となり、これまでの報告とあわせると副作用発現は女性の方が多いことが示唆される。
- ・ピオグリタゾンの処方監査においては性別や用量についてのチェックの他、服用後のフォローが重要である。
- ・今後はイベントの発生に性差の要因も加えて検討していく必要がある。

